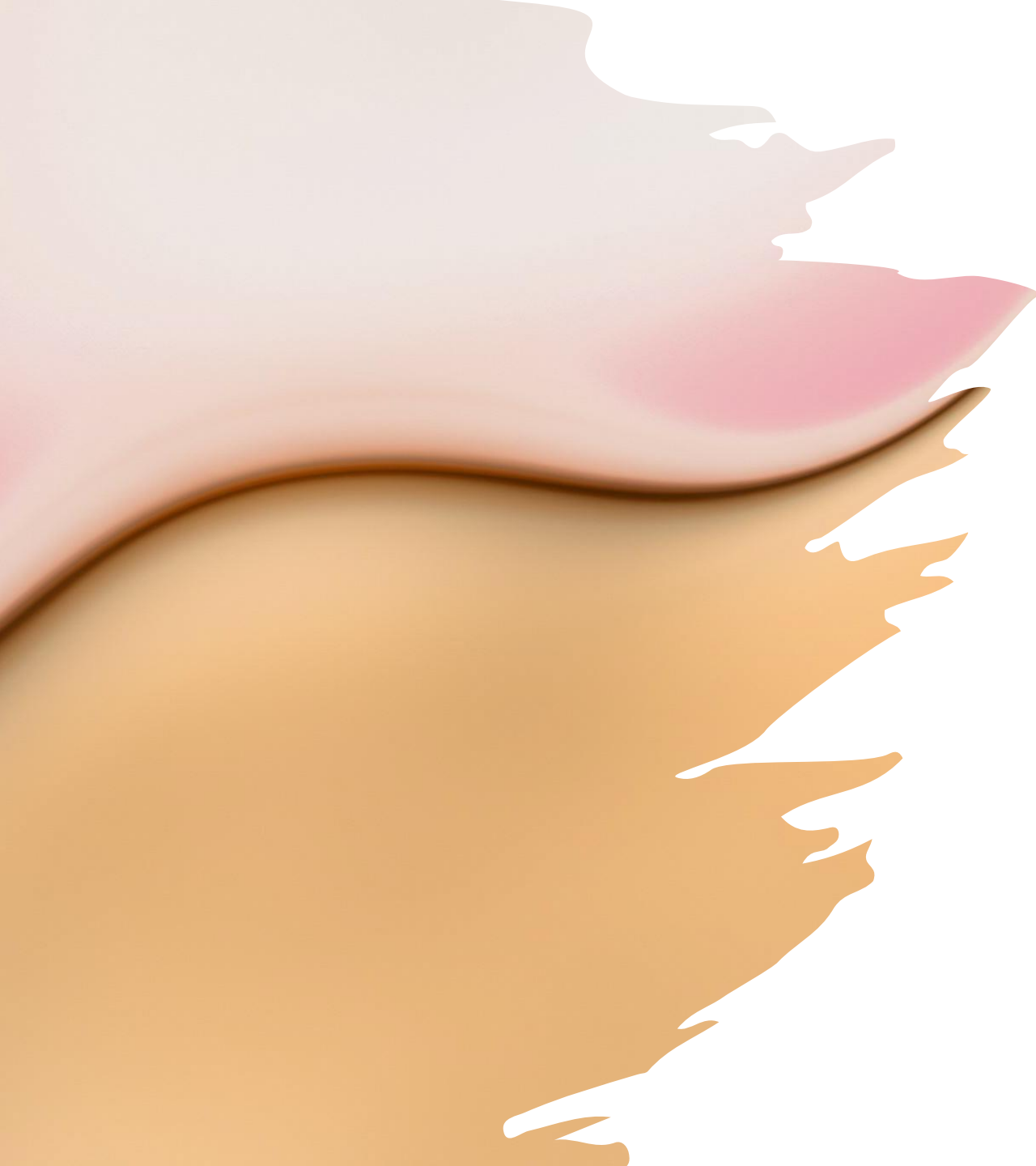




宇治市乳幼児教育・保育協働研修会
令和7年5月20日(火)16:10～16:50

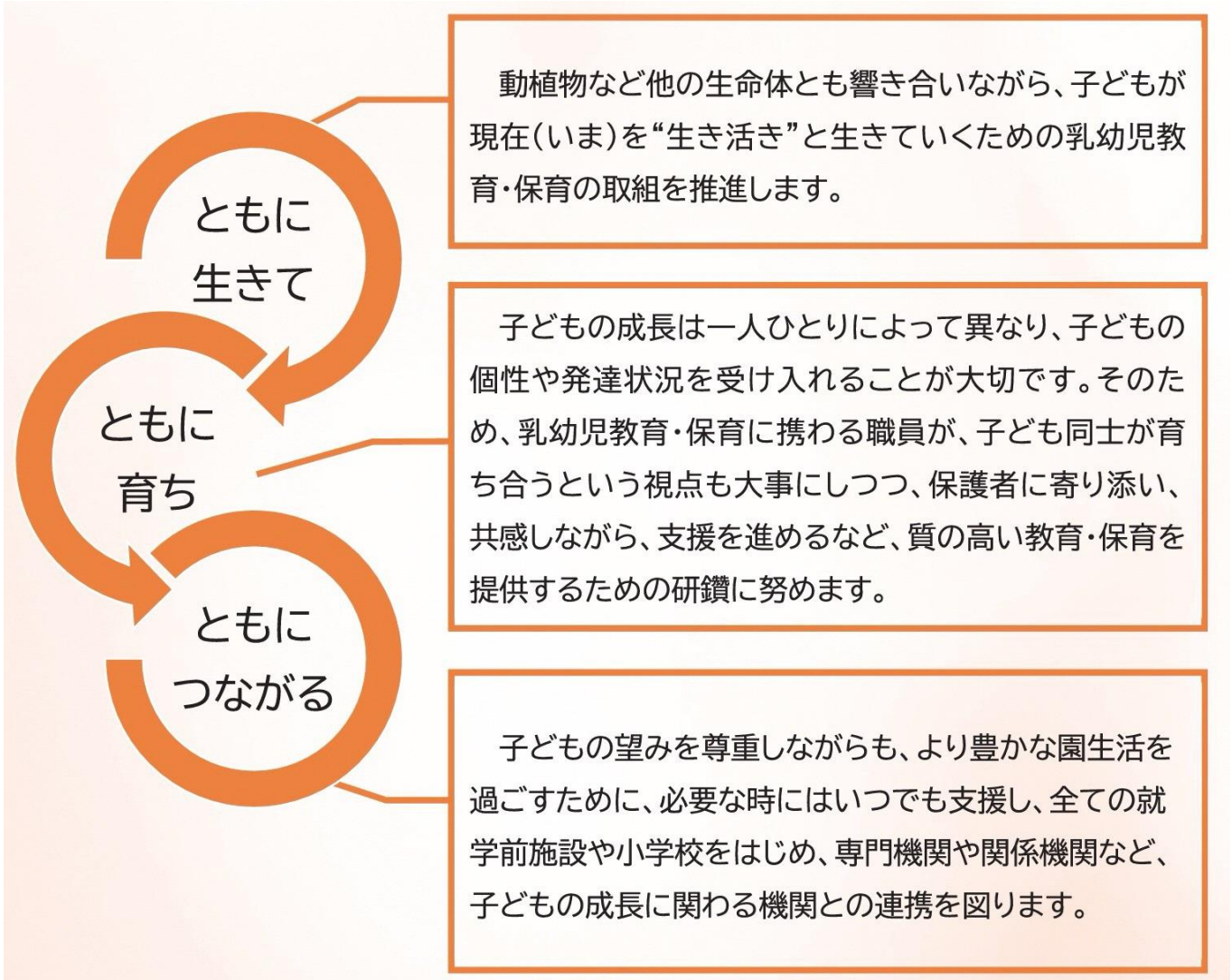
育もう 未来のつぼみ
咲かせよう それぞれの花

「ともに生きて
ともに育ち
ともにつながる」

京都教育大学
佐川 早季子

宇治市の乳幼児期の教育・保育の基本理念

育もう 未来のつぼみ
咲かせよう それぞれの花



子どもの心の育ちは 見えにくい

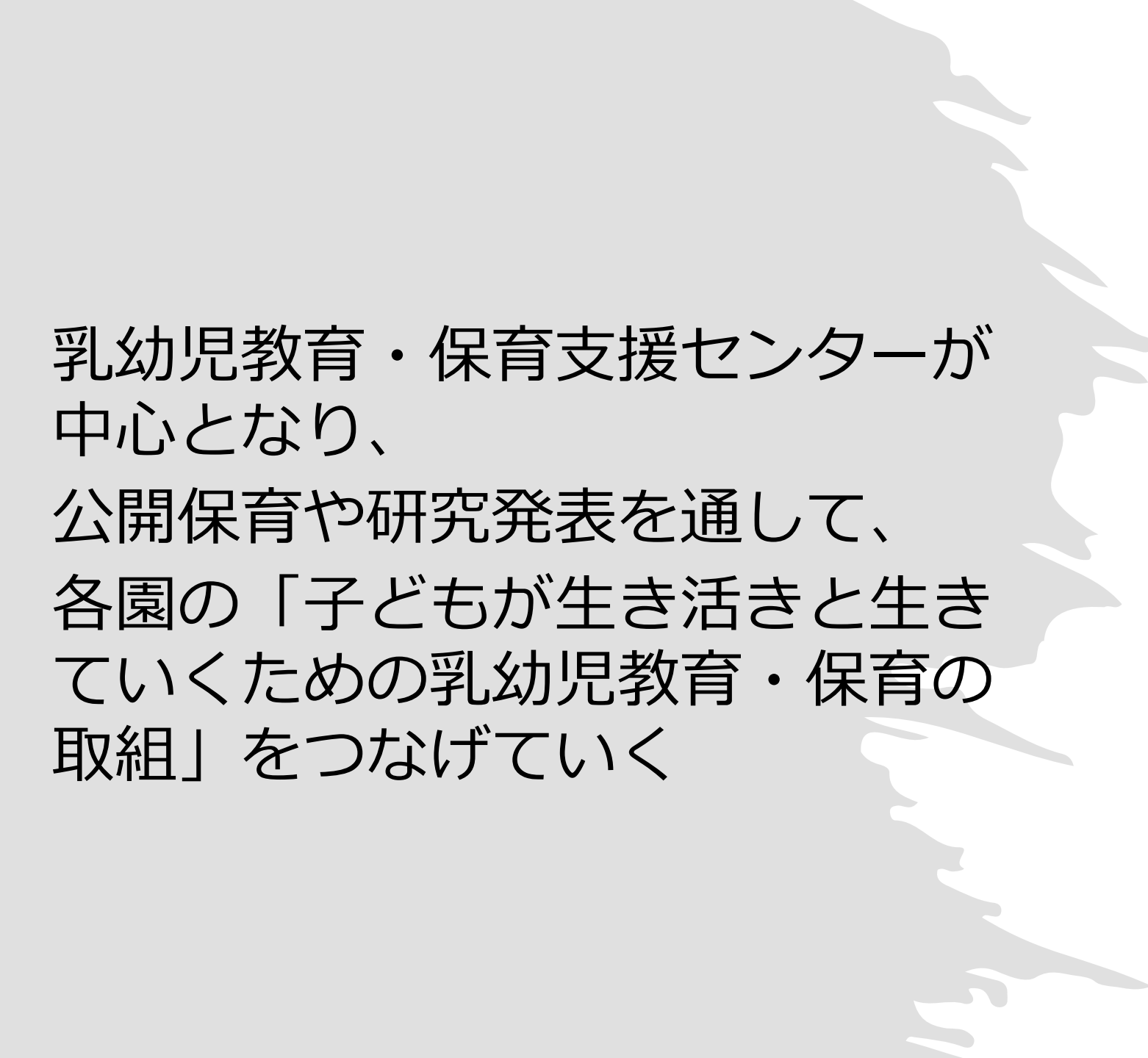
- 身の周りのことを自分でできた、皆と同じ活動ができた、集団活動に乗れないという可視的な力・能力で成長・変化を捉える傾向が強くなっている
- より大切なのは、「自分でやることに喜びを覚えているか」「一緒に活動をのびやかに楽しんでいるか」という**心のありよう**
 - **保育者が身体で、五感で「感じる」ほかないもの**
Ex)なんとなく生き生きとしていない感じ、この子なりに今この場を存分に楽しんでいる感じ・・・

エピソードを語り合うことの意味

- ・教育哲学者マキシン・グリーン

「教育を変えていくには、小さな出来事の中に大きなことを見出すこと、特定の状況での1人の子どもの中にも、はかりしれない独自の意味を見出すことが求められる」（グリーン, 1995）

- ・宇治市で子どもたちの育ちを支えている保育者・教師同士で、
子どもの姿や育ちを共有し、自分たちが大切にしたいことを確認し
合う→**顔の見える関係づくり、子どものことを語る共同体へ**



乳幼児教育・保育支援センターが
中心となり、
公開保育や研究発表を通して、
各園の「子どもが生き活きと生き
ていくための乳幼児教育・保育の
取組」をつなげていく

ともに育ち

子どもの成長は一人ひとりによって異なり、子どもの個性や発達状況を受け入れることが大切です。そのため、乳幼児教育・保育に携わる職員が、子ども同士が育ち合うという視点も大事にしつつ、保護者に寄り添い、共感しながら、支援を進めるなど、質の高い教育・保育を提供するための研鑽に努めます。

「新記録と涙」

- あなたが、この場面にいる先生だったら、どんな言葉をかけますか？
- なぜ、その言葉をかけますか？
（言葉かけの意図）

先生はどんな言葉をかけた？

「ゆりちゃんの涙は、悔し涙っていうんよ。あれは、すごくいい涙よ。涙が出るほど悔しい気持ちってね、がんばる力になるけえね。一人の力じゃなく、みんながいたからがんばれた」

- ・ 気持ちを肯定してから、次への挑戦に向けた言葉をかける
- ・ 涙が出るほどの強い感情（悔しさ）を肯定する
- ・ 結果（回数）じゃなく、過程（本気でがんばったこと）をたたえる
＝先生の願い（価値観）が子どもたちに伝わる
- ・ 負けたことは悔しいが、それをバネにする経験となる

この園で育まれているもの

- ・ 自らの気持ちを立て直し、悔しい気持ちと折り合いをつける力
- ・ 友達のがんばりを刺激に、自分もがんばるぞと挑戦する力
- ・ 友達の気持ちに気づき、その子の立場に立って励ますことのできる力
- ・ . . .

表し方は人それぞれです。正解はありません。

でも、確かなのは、**先生が願いをもって援助し環境をつくっている**からこそ、これらの力が育まれています。

なぜ、このような力が育まれるのだろう？

- 子どもの気持ちに共感しながらも、子どもが自分の力で立ち直れるよう背中を押す先生の援助がある
- 何度も援助をしてもらった積み重ねで、子どもたちに共感し励ます心が息づいている
- みんなで応援「それが大事だと思うよ」
 - = 先生が大切にしたい価値が子どもたちに伝わっている
- ほどよい距離感
- 時間枠の柔軟さ
- 保育者同士の連携（縄を回し続ける先生、他の子どもたちと中に入る先生）

教育的瞬間

- 「子ども（たち）のためになんらかの教育的な働きかけをしなければならない瞬間」（ヴァン＝マネン）
- 教師には、保育・授業のなかでの子どもの表情や行為などから、一瞬の「教育的瞬間」を捉え、働きかけを行う力が求められる

具体的な事例についての研修から 保育・授業の質を高める

- いかに子どもを見る力を養い、子どもの経験から保育方法（授業方法）を問い直し、子どもの行為に気づく力をつけていくか
- そのためには、具体的な事例を共有し、互いの思い（願い）やその思い（願い）から生じる保育方法（授業方法）を、「何のためにそうするのか」という目的に基づいて理解することが大切
- それを目的とした研修を実施し、同僚と共感的に話をし、考える機会をもっていく
- 質向上のためには、対話的プロセス（自己内対話・人との対話）が必要不可欠

→乳幼児教育・保育支援センターが研修支援の役割を担っていく

ともしつながる

- ・就学前施設と

小学校がつながる
を例に

子どもの望みを尊重しながらも、より豊かな園生活を過ごすために、必要な時にはいつでも支援し、全ての就学前施設や小学校をはじめ、専門機関や関係機関など、子どもの成長に関わる機関との連携を図ります。

小学校入学期の子どもにどんな課題があるか？

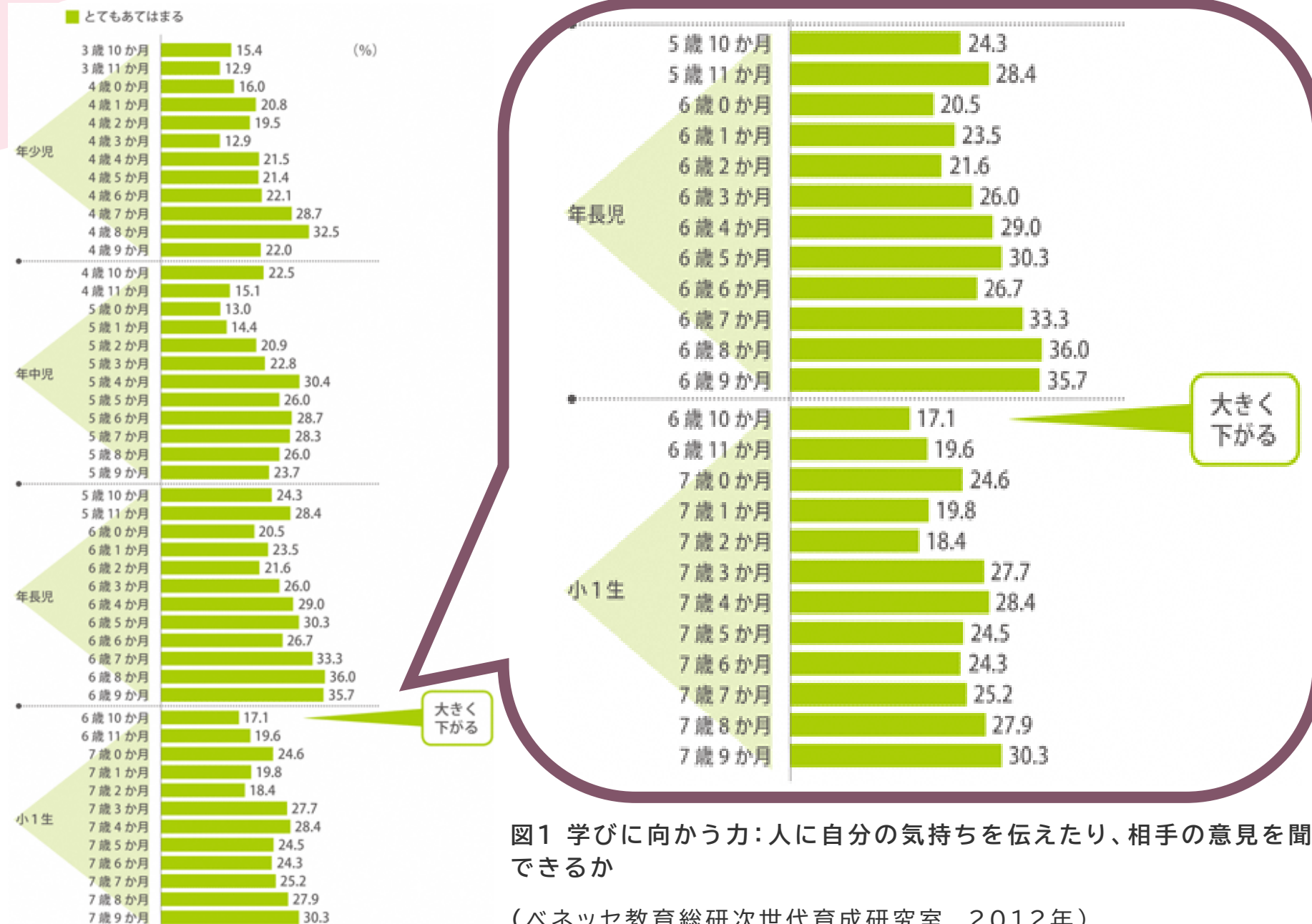


図1 学びに向かう力: 人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができるか

(ベネッセ教育総研次世代育成研究室, 2012年)

小学1年生ですでに授業についていけない子どもの存在がある

- 6歳9ヶ月と6歳10ヶ月では、わずか1ヶ月の違いしかないにもかかわらず、大きく落ち込んでいる。それは、**小学校の環境にスムーズに適応できていない**からではないかと考えられる
- 原因として考えられること(1)**幼稚園や保育所でのコミュニケーションと小学校でのコミュニケーションのやり方に差があるため、自分の気持ちを伝えたり相手の意見を聞いたりするのが難しい**
- 原因として考えられること(2)幼児期に比べて小学1年生での月齢ごとの伸びが小さいのは、**教師が介入したコミュニケーションがうまくいっていない**
- 小学1年生の中でも月齢差があり、調査時点での6歳10ヶ月から7歳2ヶ月までの子ども(11月～3月生まれ)が深刻な問題を抱えている。しかし、小学校の先生はそれに気づいていない
- 高学年になると、学力差がさらに広がることは当然

なぜ小学1年生で落ちこぼれるのか？

小学校の指導形式についていけない子どもがいる！

- 小学校に入学した1年生に求められることで、難しいのは、45分という授業の枠組み
→ 小学校導入期向けのカリキュラムを実施している学校では、授業時間を15分、20分単位に分割したり、合科的な指導をしたりするなど、幼児教育のやり方を取り入れながら、子どもたちの小学校の学び方への抵抗感を取り除いている。しかしそれを実施しているのはまだ一部
- 小学1年生では、小学校独特の学習習慣や授業に向かう姿勢が教えられる。それが小学校生活全体にわたる学習の基礎となるやり方となる。しかし、とりわけ月齢の低い子どものなかには、それについていけず、発言しなくなる子どもも出てくる。
→ せめて1年生の一学期は、幼児教育のやり方を踏まえて柔軟に対応しつつ、徐々に小学校のやり方に移行する必要がある

解決の糸口は幼小接続

- 「幼小連携」とは、幼児教育施設と小学校の教職員間の協働的な関係
- 「幼小接続」とは、幼児教育施設と小学校間の保育・教育内容やカリキュラムのつながり

❖ 幼小接続の取組が推進されることによって、子どもが先生を好きになり、学校を好きになり、学ぶことが楽しみで面白くなる。登校しぶりもなくなり、先生も子どもも主体的になって、宇治市がめざす「ともに生きて、ともに育ち、ともにつながる」が実現する

幼児教育と小学校以降の教育

幼児教育	小学校以降の教育	
経験カリキュラム ● 方向目標 「～しようとする」 ● 遊びを通した総合的指導 ● 環境を通して幼児の自発的な活動を導く指導 ● 個人内評価	幼児教育と 小学校以降の教育を つなぐ 架け橋期	教科カリキュラム ● 到達目標 「～ができる」 ● 教科書等の教材を活用した系統的な指導 ● 目標標準計画

⇒架け橋期の子どもの発達・育ちはつながっている
でも幼保と小の学習スタイルは違う
だからこその接続
「学んで○○すること」の○○に何が入るか？

映像の中の子ども
たちは、
「ただ遊んでいる
だけ」だったか？

子どもを見る「まなざし」が つながっていくことが大切

- 私たちは、どのように子どもを見ているのか？

→ 幼児教育では、**すべての子どもは有能な学び手**であり、適切な環境と出会いさえすれば、自ら進んで環境に関わり、その相互作用の中で自ら学びを進め、深めていく存在と捉える

→ そのように子どもを見ると？

教師の都合とタイミングで教える授業から、小学校でも**子どもたちの声を引き出し、活かす授業**への転換が必要

→ 問われるのは？

教師が果たすべき役割

これからの幼小接続

- これまでの幼小接続は、園（保幼）が、小学校からの「こんな力を高めてほしい」といった要望を取り入れることが中心



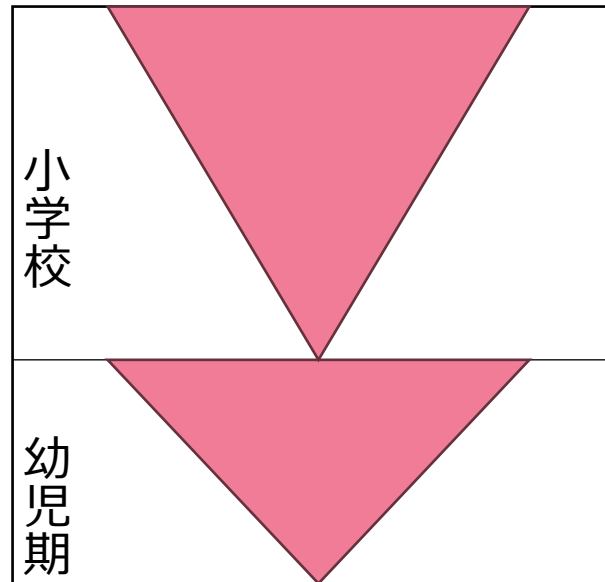
- **小学校の側が幼児期の育ちを受け止めて発展させるという発想の転換が重要**
- **幼児期に培われる学び・育ちは、**

**「子どもが学校のために準備する」から
「学校が子どもを迎える準備をする」へと
発想の転換が必要**

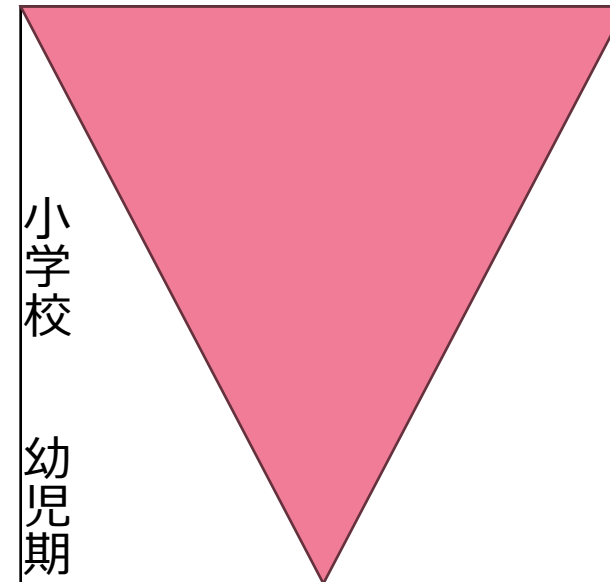
（OECD 『Starting Strong V』,2017）

幼保の育ちをベースに

小学校で学ぶことを前倒しするのではなく、 幼児期で培った力を土台にして小学校につなげるという意識



幼保の蓄積はゼロになるイメージ



幼保をベースに広がっていく

(無藤隆著『保育の学校』より)

発想の転換が鍵！ ゼロからのスタートではない

5歳児と1年生だけの問題？

- 低学年から自分の思いを持って、言葉に乗せて伝えられる子どもたちが育っていくと・・・
- 学校全体で先生たちが、そんな子どもたちに肯定的なまなざしを向け、大切に育てていくと・・・
- 高学年になったとき、自分の思いを人に伝えられて、他人の話も聞き、協力して課題に取り組むことができる。
- **それが自分で疑問をもち、探究する力につながっていく
高学年の総合の教科で花開く**

**質の高い学びを支える 環境の在り方や
関わり方を再確認するチャンスに**